

## 叢 說

### エトルスキの遺跡と

#### 其の文化 (上)

«Parla! le tombe ove la storia è muta»

文學士 濱田 耕作

#### 一、緒 言

書又は洋風書を遺して居る。三家の名は古畫備考<sup>卷二十五</sup>に見え、融思の事は扶桑名畫傳<sup>卷三</sup>、瓊浦畫工傳<sup>卷十八</sup>をも引く。と竹田の竹田莊師友畫錄<sup>卷下</sup>にも見ゆるが、いづれも簡單な記載しかない。義弟荒木如元の作品として傳はる油畫には、現に京都文科大學に保存さるゝ風景圖一幀（文化二年八月下旬の作と符記さる）がある。將來長崎派の洋畫を攷究するに當りては重要な作品とさるゝであらう。（大正五年十一月三十日記）

世界史上其の遺跡遺物を殘すこと多くして、而かも其の人類の起源の不明なるものエトルスキに若くは無く、之が踏査研究の便宜多くして斯の如く學者の之を等閑に附しつゝあるもの亦少かる可し、かの埃及の繪文字、西亞の楔文字すら之を解讀したる西歐の學者も、希臘的文字にて記せられるエトルスキの言語を未だ解釋すること能はず、クリート島の古文明の研究に没頭せる考古學者も、此のエトルスキの遺物の攻究に其の熱心を捧ぐ

ること能はざるは何ぞや、而かもエトルスキの文明が羅馬の文化の搖籃をなせることは、ミノス文明が希臘のそれに及ぼせるの比にあらず、彼等が作れる建築、墳墓をはじめ日用の家什の精巧なるは、其の文化の進歩頗る顯著なるを示して餘あり、伊太利を旅行して其の博物館にエトルスキの文化の發達に驚嘆を禁する能はざるもの誰人か限らんや、而かも其の學術的研究の盡されずして此等の材料の整理其の完きを見ざるは何ぞや、考古學的歷史的研究にも亦一個の流行ありて、學者の趣好の趨る所、大勢に動かさるゝものあるは、蓋し其の一原因なる可しと雖も、エトルスキの遺跡の發掘が數十年以前、單に希臘古陶の掠奪的動機を以て行はれ、貴重なる學術的資料の破滅散亂に歸して、學者が研究の緒を失ひたるもの亦其の原因の主きをなせるなる可し、斯の如きは單りエトルスキの遺物に止らず、東洋諸國に於いても現に支

那に其の例を逐ひつゝあり、我國亦た聊か其の感を同ふせざる可からざるに似たるは、吾人の戰慄を覺ゆる所なり、されど伊太利に於いては近年庶政其の緒につき、國家的事業としてエトルスキの遺跡の學術的發掘に着手せらるゝものあり、吾人は一旦失はれたる研究の糸口を求め出で、再び地下のラビリンスより之を闡明するの日あるを信じて疑はず、余輩伊太利に赴くこと二回、留ること約十閱月、幸に邦人旅客の多く見ることを得ざる邊鄙の地に存するエトルスキ遺跡の數者を訪ふことを得たり、乃ち書冊の上よりのみに非ざる日本人として first hand なるエトルスキの遺跡に關する觀察を、聊ながら茲に諸君の前に提供するを得るは余の喜とする所なり。

さてエトルスキの遺跡を叙するに先ちて、エトルスキなる人種の如何なるものなるかに就きて一言する所あらん、エトルスキ (Etrusci 或は Tuscii)

とは羅馬人の其の建國以前より伊太利中部に住居せし民族を呼びし語にて、希臘人の所謂 *Tyrrhenoi*、或は後の *Tyrrhēnoi* なり、彼等自身は *Rascina* と呼べりと傳ふるも、是れその一地方の勢力ある家の名なりしならむ、されど彼等は廣く伊太利中部のみならず、古くは北伊太利にも住せしことありしは、發見せらるゝ遺物によりて證せらるゝ所なり、されど伊太利に移住せる以前は何處に居りしやの問題につきては、所説區々にして歸するところを知らず、ヘロドトス其他多くの古代學者は、エトルスキは小亞細亞リヂヤより饑饉の爲め國を出でて伊太利に移るとせるに對して、獨りデオニシウスはリヂヤの史家クサントスが何等斯の如き移住ありしを記さずとて此說に反對せり、茲に於いて後世學者或は前說を取り、或は後說に本きて新しき見解を立てんとするものあり、ニーブル氏はチロル附近 (*Khnetia* 地方) より南下せるものとな

し、オットフリード・ミュラー氏は此の說を少しく變更してチロル附近より侵入せる人種に、後ちリヂヤよりの移民の混じたるものなりとなす、又たレブシウス氏は此等に反對して其のトラキヤ地方より所謂 *Tyrrhēne-Pelasgi* がアドリア海の北端地方より入り來れるものなりとし、モムゼン氏は亦たチロル地方起源說を執れり、其他或は埃及に或はフェニキヤに或はバスクに或はタタールに或はヒクソスに關係を附せんとする奇說さへ生ずるに至れり、然れどもエトルスキの文化其物の研究即ち風俗、宗教、風貌其等の研究は、吾人をして再びヘロド、ス、及びストラボ、キケロ、セネカ、タキツス、プルタルコス、ヴァルギリウス其他古代の史家文人と共に、エトルスキの幹部はリヂヤより海を渡りてポー河口に上陸し、それよりアペニン山を越えてエトルリヤの地に入り來れるものとするの尤も穩當なるを認めずんばあらざるなり、而

して其の移住の年代は、希臘より輸入せられたる尤も古き遺物によりて希臘に於ける人種大移動の年代、即ち紀元前一千年を下ること遠からざるものたることを想像せしむ。

エトルスキの住居せし地方は之を三部に分つを得べし、即ち Etruria proper, Etruria Circumpadana, Etruria Campaniana 之れなり、而して此等の三地方各々十二大國あり、市街的國家をなせしこと希臘の如かりしと云ふ、今ま伊太利に於いてエトルリヤの遺跡或は其の遺物と稱するもの北エトルリヤ、チルクムバドナ地方に少なく、南エトルリヤ、カムバニアナより出づるもの多からず、中部エトルリヤを以て最も多しとなす、此の地方に於いて所謂十二大市をなせしものは蓋し Tarquinii, Veii, Falerii, Caere, Volturni, Vulci, Rusellae, Clusium, Arretium, Cortona, Perugia なる可し、然れども此等諸市の外幾多の繁榮なる市街の存在せしや言ふ

迄もなく、此の以外の地に於いて例へば Orvieto Civita Castellana 等の如くエトルスキの著名なる遺跡の存在する所少なからず、余輩は伊太利滞在中僅に其のうち少數の遺跡を訪問し得たるに過ぎざるのみならず、今は煩を厭ひて其の内數ヶ所の遺跡につきて叙述するに止めんとす、されど以てエトルスキの遺跡の性質の一般を窺ひ、彼等の殘したる文化の如何なるものなりしかを想像するの參考たるを得んか、なほ此等の遺跡以外に遺物の聚集せられたる博物館の、エトルスキ研究に重要なを忘る可からず、殊に羅馬ヴァチカノ宮なる Museo Gregoriano 國立 Museo Villa Giulia を始めてフイレンツエ市の Museo archeologico 及び、ベルヂヤ、ボロニヤ、コルネト、キウジ等の地方博物館は最も重要な遺物を藏す。

## 二、遺跡

エトルスキの文化美術を研究したる成書は其の

數必ずしも多からず、而かも今日に於いては何れも皆な二十餘年前の出版に係り、最近の發掘發見に就て記さるれども、マルタ氏の「エトルスキの美術」(Martha-Jart etrusque, 1886)及びデンニス氏の「エトルリヤの市街及墓地」(Dennis-Cities & Cemeteries in Etruria, 1833)の二書は、今なほ重要な參考書たるを失はず、最近の發見につきては諸雜誌は現はるゝ所と伊太利政府發掘の報告書たる *Notizie degli Scavi* に記する所を見る可し、余輩は次に羅馬より漸次北進して、キウジ、フィゾレに進み、再び南下してコルチト、チエルヴェテリの遺跡に就きて述ぶる所あらんとす。

### (イ) ヴェイの遺跡

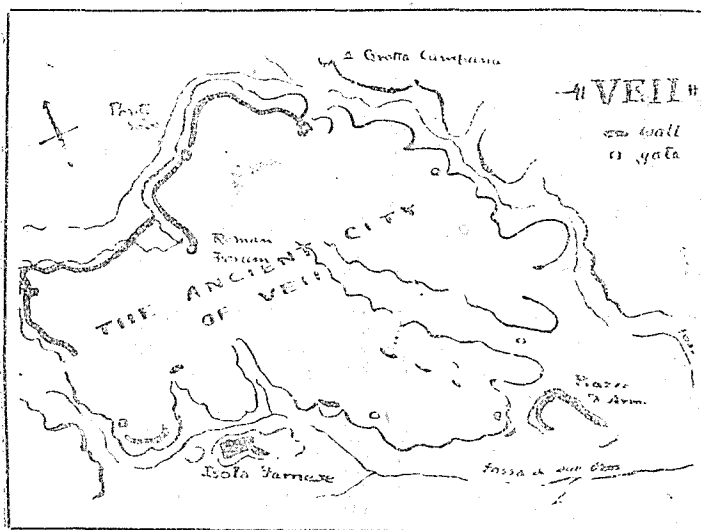
羅馬の北カムパニヤの野は遠く擴がりて、テベレの河の左岸よりサバチニの山麓ブラツチャノの湖に接す、茫々乎として限りなき荒原には住み古したる寒村の此處彼處に残れる外には、起伏せ

る丘陵の上に羊飼ふ牧者の影の見ゆるのみ、羅馬の北門「ボルタ、デル、ボ、ロ」を出で「ボンテ、モルレ」の古橋を渡りて北すれば、これ古への「ヴィヤ、カツシャ」の道にしてブラツチャノの湖に至る可し、千九百十四年四月春は老いたれど空は晴れ日は麗かなる午後を余は林大使をはじめ、中島海軍大佐、伊藤書記官等と共に自動車を驅りてヴェイの遺跡を訪ぬることを得たるは、余の深く林男爵の好意に感謝する所なり、これ實に余の伊太利に於いてエトラスキの遺跡を見るのはじめなりき。

モルレの橋より二哩半ばかりにして、道の左手に「チロの墓」と稱する羅馬時代の石棺を見る、此の地點よりは古くヴェイに至る道(Via Veientana)は分れて右するなり、我等は更に進みてLa Soriaの村落を過ぎ、ブラツチャノ道に分れてスツリ(Sutri)道を直に行くこと半時間にしてイブラ、フ

アルチーゼ (Isola Farnese) の村に達す、之れ即ち古へのヴェイの一角なり。

ヴェイ (Veii) 今或は Veio と書す、ヴァイルギルスは其詩中ヴェイの名を記さるも、此の町のエトルリヤに於ける最古のものにして、エトルスキの十二同盟市の一たりしことは疑ふ可きにあらず、其名の起源につきは、或はエトラスキの神の一なる Veinus 或は Ve-jovis の名より訛したるものなりと云ひ、或はオ



ヴェイの遺跡略圖

スカン語の車の一種 (plastrum) を云ふ Veia の語より出たりといふ (Vulgo の語の源)、されど恐くは前者を以て穩當とす可きか、羅馬に尤も近きエトラスキの市なりしかば羅馬の勢力發展と同時に、始終劇烈なる衝突を生じ、流血の史乘を残せり、其の第十回戦争に於いて羅馬ファビウス一族はヴェイ人の奇計に欺かれ伏兵に陥りて、一少童を除くの外悉く殺戮せらるゝの悲運に會せしが、四〇六年第十四回戦争に於いて羅馬の將 M. Furius Camillus は

十年の長き包圍の後、墜道 (cuniculus) を作つて  
ヴェイの本丸に強襲し之を陷す、三〇六年ヴェイ  
遂に羅馬の爲めに亡ぼされぬ、斯くてヴェイの市  
街寺院は破壊せられ、其の材料は多く羅馬に運ば  
れて、「永久の都市」を裝飾するの具に供せられ、  
此の「伊太利のトラヤ」の跡には「當年の城壁はた  
だ牧者の角笛を反響し、其の殘灰の上には夏穀の  
波立てるあるのみ」とアシバの詩人プロペルチュ  
ス (Propertius) の詠嘆する所となりぬ。

“ Et Vci veteres, et vos tum regna fuistis,  
Et vestro postea est aur a sella foro ;

Nunc intra muros pastoris bu cina leni  
Cantat, et in v. stris ossibus arva me-  
tunt. ”

されどアウグスツス帝は後ち此地に羅馬の小事  
をに建設し (Municipium Augustum Veiens) コン  
スタンチウスの頃に及びしが、後ち全く廢亡して

文獻にも見る所なし、而してイヅラ、ファルチー  
ゼの小村の其の一隅に現れしは一〇〇三年の文書  
にはじめて之を認むるを得。

今日ヴェイの遺墟はイヅラ、ファルチーゼ村の  
北に亘りて周圍約三哩半、Fosso di Fornello 及  
び Fosso de due Fossi (或は Fosso dell' Isola)  
の二小流其の東北及び南方を過ぎ、荒草離々とし  
雜木道を埋め、處々に古ヘヴェイの遺壁古墳を見  
るのみ、而してヴェイの本城は其の市街を形成せ  
る臺地と離れて東方に孤立せる小丘にして、今は  
Piazza d' Armi と呼ぶ。

ヴェイの遺跡に於いて今日見る可きものは頗る  
少なし、隨處にエトラスキの石壁(凝灰岩)の斷續  
して存するものあれど多く云ふに足らず、本城の  
址よりは泥像の破片發見せられ 尤も古きものは前三世紀 神祠の  
址なるを認めしむるものあれど、他に見る可きも  
のなし、されど羅馬時代の「フォラム」の址より

は一八一二年、アウグストス、チヴエリウスの巨頭、チヴエリウスの像等を發見し（今在ヴァチカノ博物館）又た同處より出でし十二個のイオニヤ式柱は今ま羅馬に移され Piazza Colonna の西方の家屋を飾れるあり、此の外 Columbarium の岩石に刻まれたる、Ponte Sodo の半天然橋等あり、訪客の注意を惹くのみ。

ヴェイに於いて今日古墳の見る可きものは、ただ一八三四年 Marchese Campana の發掘したる、Grotta Campana（カムバナの墓）あるのみ、されど此の墳墓の奇古なる壁畫は、エトルスキの古墳中最も古きものとして、ヴェイの遺跡が吾人の往訪を敢てせしむるに充分なるものありて存す、この古墳はヴェイ市外に接して北方の丘陵にあり、長さ「ドロモス」ありて玄室に入る、入口の左右に二個の石獅あり、墓室は天然の凝灰岩を切り穿ちて前室、後室の二より成り、前室は大にして兩

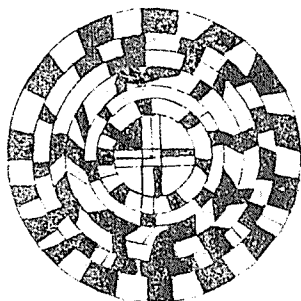
側に二個の棺臺を作出し（高サ二尺五寸許）其の上に各々遺骸を載せたりしが、發掘の後外氣に觸るゝと共に破壊せり、而して右方のは甲冑武具等を其側に置きたるより其の男子たることを知る可く、左方のものには之れを缺くによりて其の妻女のものたるを想像す可し、而して此の二個の屍体の外多くの大なる骨壺の地上に置かれたるものあり、小さき後室の内にも同じく多くの大骨壺を置きたりといふ、（後室中央に銅製火爐を置きたり）之を以て見るにエトラスキが埋葬の外に、殆ど同時に火葬の風の並存せしを知るに足る。

此の墳墓に於いて特に見る可きものは已に言へるが如く其の奇古なる壁畫なり、壁畫は前室の奥後室の入口の兩側と、後室の奥壁とにあり、後者は六個の車輪形若くは、圓楯の如きものを書き、赤黄の彩色を施し、我が九州の古墳内の裝飾と相似たるものあり、次に前室の壁畫は左右壁を各々

上下の二區に分ち、各その中心に馬、スフィンクス、獅子等の圖を大きく書き、その傍には豹犬鹿等の動物と唐艸的の植物を配す、而して左右上方の區廓内には動物の上に人物の騎れる(右男)を書き、なほ右方の

は二人の徒歩して馬を導くものを作れり其の一は斧を有せる處より見て、恐らくは Charon なる可しと云へど、全体の圖様の意義につきては明確なる説を聞かず。

畫面には赤黄黒等の強き彩色を施し、今なほ其の大部分は鮮明に残れるを見る、其の動物の脚長くして胴細く、其他の手法頗る古拙にして、之を希臘の陶畫に比較するに、當に第六世紀のもの



後壁畫の一部

趣を同じくする所あり、頗る東方的の影響あるを認む、されば此の古墳はエトラスキ古墳中、壁畫を有するもの、尤も古き一例にして、羅馬の所謂建國時代を去ること遠からざるものと云ふ可く、當時エトラスキの市ヴェイが已に人民の據るところとなり、文化の發達大に見る可きものありしを推察するに足る。

#### (ロ) キウジの遺跡

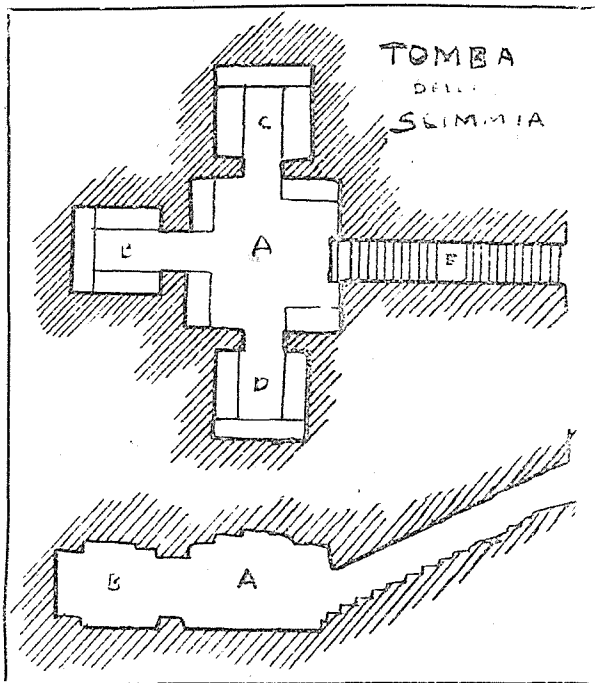
キウジ (Chiusi) はエトルリヤの大都市にして、十二同盟市の一なりき、羅馬よりフイレンツエに至る鐵道によれば、同じくエトラスキの古墳あるオルゾイエトの驛を過ぎシユナに至る、支線の分岐點なり、其の古名を Camars と云ひ、エトルリヤの先住民ウムブリ人の建つる所なりと云ふ、後ち Cusim と稱す、エトラスキの市址は丘上今の市街地にあるも、僅に石壘の残れるものある外見る可きものなし、たゞ此の市址の周圍にある丘陵に散

在する墳墓の吾人の注意を惹くあるのみ、余は一昨年の春五月シエナを見て、キウジ驛前の逆旅に一泊して、二三の墳墓を訪ふことを得たり。

臘の影響少なく、コルネトの Tomba del Baron 等と同時代に置く可きものとす、又た入口に對せる小室にも壁畫あれど、殊に見る可きは其の天井

Tomba della Scimmia

（猿の墓）はキウジ附近の墳墓中尤も見る可きものにして、一八四六年フラシッワーの發見するところなり、深き石階を下れば一大室あり、その三方に小室の聯れるを見る、大室には四床あり、周壁に拳闘、角力等の圖を畫き、その一隅に猿の圖あり、之れ此の墓の名の起る所以なり、壁畫の様式はヘルビヒ氏に従へば希



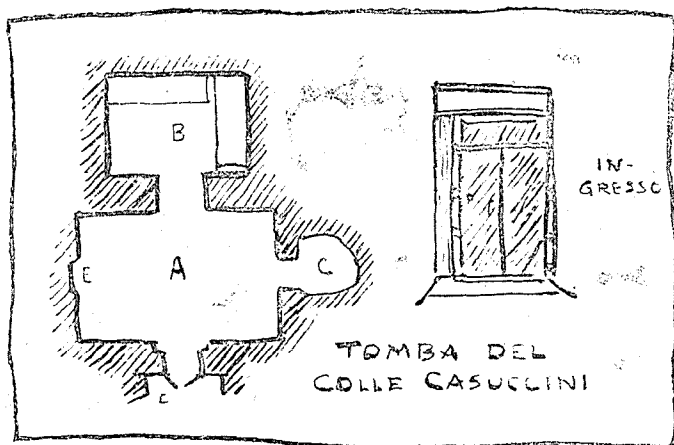
墓の猿ジウキ

の構造にして組入天井の形を現し中央には圓形中に花形を描き、彩色を施せるは、當代家屋の構造を髣髴するに足る。

次に Tomba del Colle Cascinini は其の入口に觀音開きの石戸を現存するは珍らしく、内部の大室は低くして床なく、周壁は

會宴及競技の畫を作れり、此の壁畫は寧ろ普通のものに過ぎざるも、其の左手の壁には入口と戸を畫きて見せたるを、天井の構造のよく木造の手法を示せるとは殊に面白し右手の壁には口を開きて内に半成の室あり、正面の壁より入れば内室あり、二床を有し壁畫あり、此の墓は一八三三年發見するところに係る。

最後に Tomba della Pacetaneuse は小き墳墓なれど、其の入口は石戸を有すること前記の室の如く、天井の眞正なる穹隆より成れるを注意す可し、内部には八個の小石棺あり



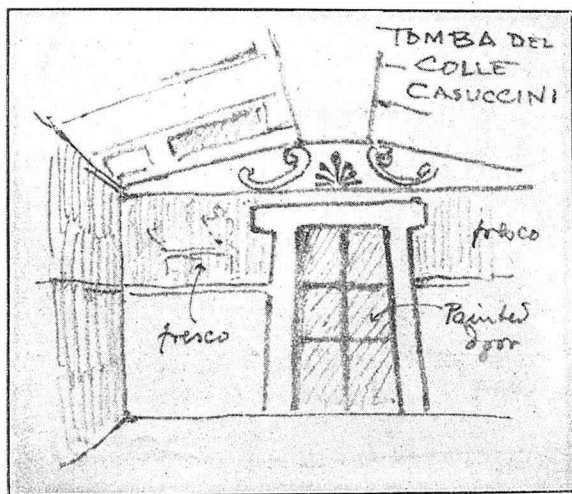
り、壁畫を有せず、エトルスキの墓中新らしきものに屬す、而して此の墓はタスカニ一の尺度 *Duccio* (二十九吋五二八) によりて奇零無く測定し得るは、當時の尺度を知るに面白き資料といふ可し。

#### (一) ファイゾレの遺跡

これは余の見たるエトラスキの遺跡中尤も北部に位せるものにして、かの有名なるファイレンツエの東北三哩ばかり低き山上にあり、伊太利を旅する者ファイレンツエを横らざるもの無く、ファイレンツエに留まるものファイゾレの勝を訪はざるもの少し、されどファイゾ

レに於けるエトルスキの遺跡は旅客の目を惹くもの  
の少なきを以て往々にして看過せらるるを免れず  
余の如きも最初に此處を訪問せし時は終に之を發  
見すること能はずして、空しく山を下りしが、昨秋再び此  
地に旅して、終に其の巨石の遺跡を見ることを得たりき。

フイヅレ (Fiesole) 古くは Faesulae と云ふ、古來史上に其の名を散見するのみにしてエトラスキの市として顯著なる事件の之に關するものあるを聞かず、遺跡の主要なるものは山上に繞らされたる石壁にして、羅馬時代の演劇場址の東北部にあたる一部尤も善く遺存せるを見る、長さ七



壁左室前墓の丘ニチスカ

八尺より一丈に及ぶ巨石を規則正しく積み上ぐる  
こと七八段に及び、構造の堅固精巧なる驚く可き  
ものあり、其の石材は南エトルリヤに於けるが如  
き柔かき凝灰岩に非らずして、ダンテの所謂マチニョ  
(Macigno) と稱する此の山の堅き鼠色の石なるは大に  
異なる所りとす、石壁の繞るところ不整形の四角形を  
なし、其の規模は寧ろ頗る狭少なるを覺ゆ。

羅馬劇場の遺址は頗る大なるものにして比較的善く保存せられたり、或は之を以てエトラスキ時代に起源を有すとすものあれども信す可からず、余は一昨年

の春圖らず此の劇場に於いてタスソーの「アミンタ」の演ぜらるゝを見、古代演劇の面影を偲ぶことを得たり、西北隅はフイゾレの尤も高き丘にして古へのアクロポリスなり、今は何等の遺跡をといめざれど、フランチエスコ派の小僧院あり、此の地點より西の方フイレンツエの市を遠望するは蓋し一佳景といふ可く、文人墨客ならざるも、此の大觀を窮めて誰か詩情を動かさざるものあらむ。

## (二) ペルヂャの遺跡

ペルヂャはエトルスキの古市にして今なほ其の生命を傳ふるものうち尤も大なるものと云ふ可く、其石壘城門の構造の壯大なるエトルスキの建築的造詣の偉大なるものを示す最好の標本なり、ペルヂャはウムブリヤ平野のうちの丘陵地に據り古ヘエトルスキの十二同盟市の一なり、紀前三一〇年アレツチウム及びコルトナと共に羅馬人の有

に歸す、エトルスキの舊市は今のペルヂャの中心なる伽藍の廣場を中心として、其の廣さ現在市街の約四分一に及べり、石壘の遺跡は北西より西方に於いて尤も善く保存せられ、キウジ等と同じくトラベルチノ石を以て作られ、巨大なる長方形の石塊を規則正しく積み上げたる構造は今なほ街家市區の間に認む可し、而も其の尤も驚く可きは當初の城門の隨處に遺存せることなり、就中 Arco d'Augusta はエトルスキの造るところにして後ち羅馬時代の修補あり、今なほ Augusta Perusia の記銘を見る、蓋し上層のアーチは羅馬時代のものにして、更に其の上のアルケードは文藝復興期の増修に係る、高さ凡て七十尺可、ペルヂャ市に於ける交通の一要路として行客の之れを過ぐるもの、エトルスキの壯大なる建築を仰がざるものなし、又た Via Marziale に面して城壁のうちにエトルスキの古門を移し簾せるあり、之れを Arco

Marziale 或は Porta Marzia と云ふ、之にも Augusta Persia, Colonia Vibia の銘あり、下部の大アーチはエトルスキのものならんも、上部の六個の方柱及び其の間なる胸像は羅馬時代のものなり、此の外 Susana, Eburnea, Mandala の三門もエトルスキ時代のものなりといふ。

ベルヂヤ附近には亦たエトルスキの墳墓多く、其の内より發見せられたる遺物はベルヂヤ大學附屬の博物館に出陳せらる、而かも墳墓其のものうち最も見る可きはサン、コンスタンツオ門外の南三哩臺地の端鐵路の踏切に近く存在する *Uso. Iero de' Volumi* (ヴォルニの墓) に若くは無し、墓は深く地下に切り開かれ、長き石階を降りて進めば戸口あり、古への墓門にして元とトラベルチノの巨石を以て戸を作れり、今なほ存す、内に入れば中央に大室あり、天井は八形となりて垂木等の形を模せり、九個の小室ありて此の大室に接す

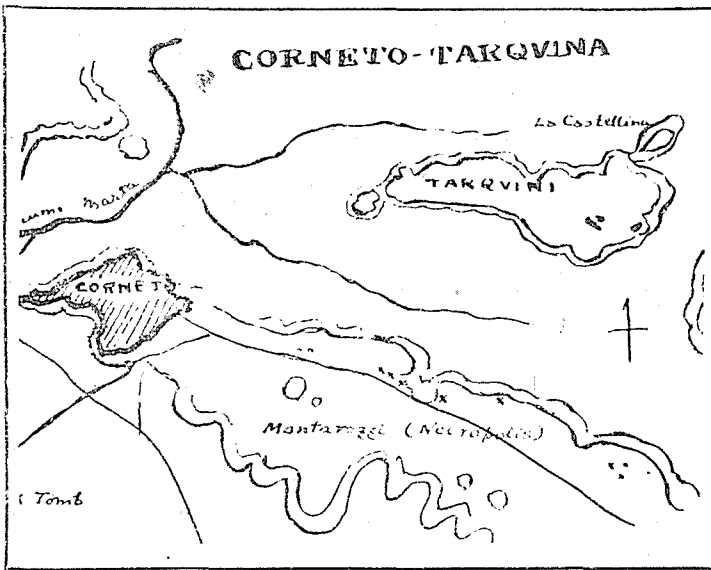
其うち入口に對せる一室に今なほ多くの石棺を藏し、其の銘文によりて Velimnas (*Voluminus* 羅馬語) 家のものなるを知る可し、正面には主人公 *Anus Voluminus* の棺あり、二人の天使の像を附したる棺臺の上に置かれ、棺上にはエトルスキ風に横臥せるアルンスの像を安ず、其の右に彼の男兒及び若き妻 *Volia* の棺あり、左手には彼の女兒の腰かけたる像ある棺あり、又た家屋形の精巧なる大理石棺を藏す、此の室の天井にはメヅーサの浮彫あり、入口の壁には蛇の頭を守護神の意もて附せられたるも面白し、又た中央室の天井よりテラコッタの燈器の昔ながらに懸垂せるは、特に興味を感じる所なり。

他の諸室にも各數個の棺あり、階上の番所にも多數の棺を置きたり、此の墓より出たる棺凡て百にも上る可し、蓋し此のヴォルニ族はベルヂヤに於けるエトルスキの名家にして、羅馬時代に至

りても文獻に屢々現れ文名をなせる人もあり、此の墓は其の時代より云へば寧ろエトルスキの墓中新しき時代に屬するものなれど、一家の墓(Family tomb)の一例として最も善く其の性質を現せるものなりと云はざる可からず。

(ホ) コルチト、タルクイナの遺跡

羅馬よりピサ、ゼノアに至る海岸線鐵道に搭すれば二時間を経ずしてチヴィタヴエキヤを過ぎ暫くにしてコルチトの驛に



達す、驛の東方丘陵の上に幾多の塔影參差するは之れ即ち中世の市コルチトにして、ロマネスク式の古寺と古屋とは市街の隨處に之を見る可くゴシック式の Palazzo Vitelliano は市の入口に高く立ニつて在りし昔の面影を傳遺ふ、此の古めかしき伊太跡利の小市街は、古のエトルスキの十二市の中心と圖して仰がれたる Tarquinii の墓地の一端に生れ出でたるにて、山骨現はれ荒艸に被はれたる Turchia (或は Piano di Civita) の

小丘の此の墓地丘の北方に立てるこそタルクイニの市街の跡なれ。

タルクイニの建國は傳説によれば、トロヤの戰爭後間も無く、リヂヤ王 Atys の子 Tyrrhus は饑饉の爲めに其國を出で、伊太利に來り、エトルリヤの十二市をはじめ、この時彼は其の親族 Tarichon をして其の業に従はしむ、タルコンの名より此のタルクイニの市名起るといふ、斯の如くタルクイニはエトルリヤの始國と尤も密接なる關係あり、十二市の政治的中心には非ずとも、少くとも宗教的、精神的中心として尤も重きをなせることは之を想像するに難からず、而して今日吾人はタルクイニの遺跡を以てエトルスキの壁畫研究の資料の中心として之を重要視するなり、何となれば市街の遺跡は何等見る可きものなく、たゞ墳墓の壁畫の他の諸地方に勝りて多く存するものあればなり。

此等墳墓の壁畫に就きてはデンニヌ氏等の著書に其の詳しきを述べたれば今はたゞ余の見るところに就きて尤も簡單に記するに止めんとす、此等諸墓は Montarozzi の上に擴がりて、其の主要なるものゝみにても二十四あり、此のうち余の見たるは

- (1) Tomba delle Caccia e Pesca (1873發掘)
- (2) Tomba delle Leonesi (1873)
- (3) Tomba della Pulcella (1873)
- (5) Tomba dei Leopardi (1873)
- (6) Tomba del Letto funebre (1873)
- (7) Tomba del Triclinio (1832)
- (8) Tomba dei Baccanti (1832)
- (10) Tomba del Tritone (1882)
- (11) Tomba degli Scudi (1870)
- (13) Tomba del Polifemo o dell' Orco (1868)

(18) Tomba delle bighe (1826)

(19) Tomba della Cor a dei Cavalli o del Borne (1826)

(20) Tomba

dei Torii

(1892)

(23) Tomba

degli Auguri

(1878)

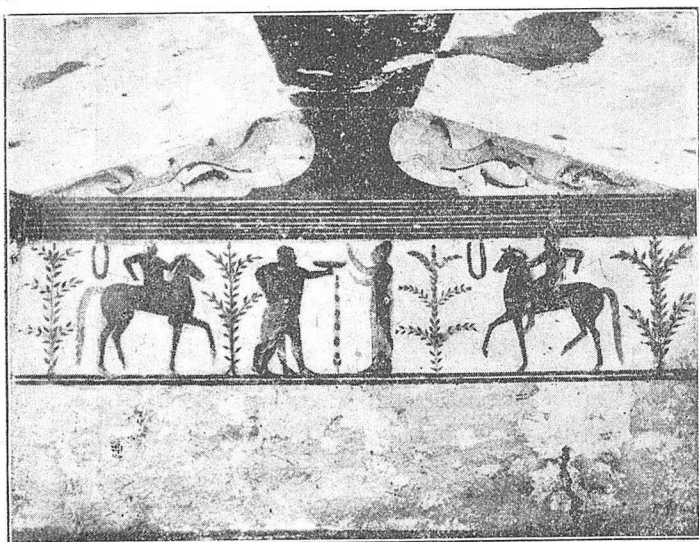
の十四なり、此のうち(19)「男爵の墓」は Tomba delle In crizioni 及び Tomba del Morto に次ぎてコルチトの墓中尤も古きものにして、デンニス氏の所謂古拙時代或は純エトル



キ式に属するものなり、騎馬の行列、其他を畫き彩色は單簡なるも善く保存せられ、馬體の背高く細き等凡て畫法の古

きを示せり、少くとも希臘に於いてポリグノトス等出で、繪畫の自由に發達せる以前の様式を示す次に(7)「トリクリニオの墓」はエトルス畫キ墳墓壁畫に尤も普通なる會宴の光景を描き、舞踊せる人物等あり、布置結構巧致にして、彩色亦複雑となる、思ふに希臘に於て繪畫の尤も發達せる時代の影響を受けし

ものならむ、(1)「楯の墓」も同じ時代に屬し、狩獵漁撈の圖ありて面白きも、其技巧は稍々幼稚なるを見る、次は(13)「オルコの墓」は其のプラン複雑にして二三の墓の相合したるものなり、大室には會宴の圖等を畫き他の小室には黄泉の光景を寫す、大室の壁畫は破滅したるもの多きも、其うち一個の婦人の頭部は其手法の巧妙にして優雅なる實にエトルスキの畫中之に過ぐるはなかる可く、全く希臘的にしてデニス氏の稱して *profile of ideal Greek type*



男爵の墓の壁畫の影を  
 示したるものと見  
 種凄愴の感を與へしむるも  
 のあり、希臘に於けるペロ  
 ポネソス戦争時代の壁畫  
 の影響を示したるものと見  
 何れも畫法頗る巧にして彩  
 色も、他の壁畫に於いて見  
 畫るが如く裝飾的ならず、其  
 の畫題の精神を表現して一  
 種凄愴の感を與へしむるも  
 のあり、希臘に於けるペロ  
 ポネソス戦争時代の壁畫  
 の影響を示したるものと見  
 男爵の墓の壁畫の影を  
 示したるものと見  
 種凄愴の感を與へしむるも  
 のあり、希臘に於けるペロ  
 ポネソス戦争時代の壁畫  
 の影響を示したるものと見  
 男爵の墓の壁畫の影を  
 示したるものと見  
 種凄愴の感を與へしむるも  
 のあり、希臘に於けるペロ  
 ポネソス戦争時代の壁畫  
 の影響を示したるものと見

る可し(前四世紀)、此の墓の壁畫と同時代と思はるゝものは(10)及(11)の墓の壁畫なり、(10)の墓中の方柱にあるトリフォオの圖、殊に(11)のそれなる床上の男女の圖の如き繪畫としては寧ろ優秀なるものに屬すべし、最後に(22)「牡牛の墓」は尤も近く發掘せられたるものにして、祭壇と騎馬の士の外、尤も淫猥なる圖を描きたり、ミハエリス氏は此の墓の圖を以てエトラスキ壁畫中第一期の末(前六世紀の末)のものとなせり、されど余は左程古きものとするの說に贊する能はざるなり。

## フンデルトシャフト

## の集團に就いて

文學士 植村清之助

歐洲中世の大部分を占めて居つた自然經濟の時代、土地が生産の主要素を成して居つた社會生活

では、土地制度があらゆる政治的社會的事象と密接なる關係を有して居つたのである。勿論是等の諸事象を以て土地制度の必然的結果と見做すは誤れるの甚しきものではあるが、兩者の間に離るべからざる因縁、相關的事情の存在して居つたのは否定することが出来ない。就中軍務に關する制度が土地と極めて親密なる關係の下に存立して居つたことは、殊に注意すべきであらう。云ふ迄もなく、かの封建制度は最もよくこれを證明して居るのであるが、吾人は該制以前即ち一般徵兵制度の維持せられて居つた時代に於ても、猶軍務と土地所有との關係を認めることが出来ること考へるのである。(この事は大正四年四月の史學會大曾の西洋史部會に於て論述し、其要旨は同月發行の史學雜誌に掲げたのである)而もこの關係は土地定着の純農業時代に入らない原始ゲルマニの社會に於ても存在して居つたやうに考へられるのであつて、余はこの觀察點からフンデルトシャフトの集團を解釋しやうと考へるの